



内田町の大イチョウ



定光寺街道（殿様街道）



# 歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見 せと 歴史と文化財を知る見学会 「水野の殿様街道を歩く」

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団

日時：令和4年11月13日（日） 13時00分 瀬戸市文化センター北駐車場集合・バス出発

13時20分 中水野駅前 内田町遺跡・大イチョウ解説（13時45分出発）

13時50分 定光寺街道（殿様街道）見学 水野大橋・東光寺・街道（～川平町）（14時55分発）

15時05分 定光寺・源敬公（徳川義直）廟見学（15時40分発）

16時00分 文化センター到着・解散予定

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

やきもの生産  
の変遷

今回見学する文化財とその関連年表

BC2700～2000（縄文時代後期）内田町遺跡 狩猟用落とし穴  
4世紀（古墳時代初頭）内田町遺跡 方形周溝墓築造

古墳	5世紀		
本地大塚古墳（西本地町2丁目）	6世紀		
宮地古墳群（上之山町2丁目）	7世紀	飛鳥	須恵器
	8世紀	奈良	須恵器
	9世紀	平安	灰釉陶器
広久手30号窯跡	10世紀		
木造十一面観音菩薩立像（下半田川町）県 木造阿弥陀如来立像（下半田川町）県	11世紀		
	12世紀	鎌倉	山茶碗・古瀬戸
古瀬戸瓶子（寺本町）	13世紀		1336（建武3）年 定光寺 覚源禅師（平心処斎）により開山
陶製狛犬（深川町）国	14世紀	南北朝	12世紀中葉～13世紀初頭 内田町遺跡（第1期）
瀬戸窯跡【小長曾窯跡】（東白坂町）国	15世紀	室町	13世紀前葉～14世紀前葉 内田町遺跡（第2期）
永享年銘梵鐘 聖徳太子絵伝（塩草町）	16世紀	戦国	14世紀後葉～15世紀前葉 内田町遺跡（第3期）
定光寺本堂（定光寺町）国 織田信長制札（窯町） 菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉] 瀬戸窯跡【瓶子窯跡】（鳳山町）国 源敬公廟（定光寺町）国	17世紀	安土・桃山	1504（永正元）年 東光寺 雪心和尚により開山
笠原村・両半田川村国境争論絵図（東松山町） 石造地藏菩薩立像（片草町）	18世紀	江戸	大窯製品
	19世紀		連房製品
陶質十六羅漢塑像（寺本町） 六角陶碑（藤四郎町） 旧山繁商店（仲切町・深川町）国登 瀬戸永泉教会礼拝堂建造（杉塚町）国登 陶製梵鐘（深川町）	20世紀	近代 (明治) (大正) (昭和)	1650（慶安3）年 徳川義直逝去 1652（慶安5）年 源敬公廟（墓・唐門・焼香殿・宝蔵・築地塀・竜の門）建立 1699（元禄12）年 源敬公廟（獅子の門）建立

2022（令和4）年 源敬公廟保存修理工事（～令和6年）

## 内田町遺跡

市域中部を流れる水野川は、蛇行を繰り返して水野盆地内を西へ流れ、水野盆地西端で南に大きくカーブし、再び北に向って庄内川と合流します。本遺跡はそのカーブした右岸にあたり、北側の丘陵麓までの南北約400m、東西約750mの広い範囲に遺物散布地が広がっています。遺跡範囲の中央を南北に愛知環状鉄道が縦断しており、その西側について、平成10年度及び11年度に発掘調査が行われました。調査では、縄文時代から中世に至る遺構・遺物が確認されており、長期にわたって集落として利用されてきた地域であったことが明らかになりました。

発掘調査では主に縄文時代、古墳時代前期、中世の3つの時期の遺構や遺物が検出されました。この内縄文時代は、調査範囲の中でも主に西側のA・B区で確認されました。確認された遺構には落とし穴状遺構、土坑、小穴群などがあります。落とし穴状遺構はA区で3基まとめて見つかり、平面形はいず

れも直径1.3m～1.4mの楕円形となります。床面中央部に直径25cm程度の小穴があり、細木が数本立てられた痕跡がみられました。この細木は、先端を尖らせ、尖った部分を上にして埋め込む、いわゆる逆茂木と考えられ、狩猟のための落とし穴として掘られた遺構であると思われます。一般的に落とし穴は丘陵尾根や斜面など猪・鹿などの通り道に掘られ、内田町遺跡のように沖積地で確認された例はみられません。水辺などに来る獲物を対象とした落とし穴とも考えられますが、愛知県内では最初の検出例であり、類似遺構の発見が期待されています。

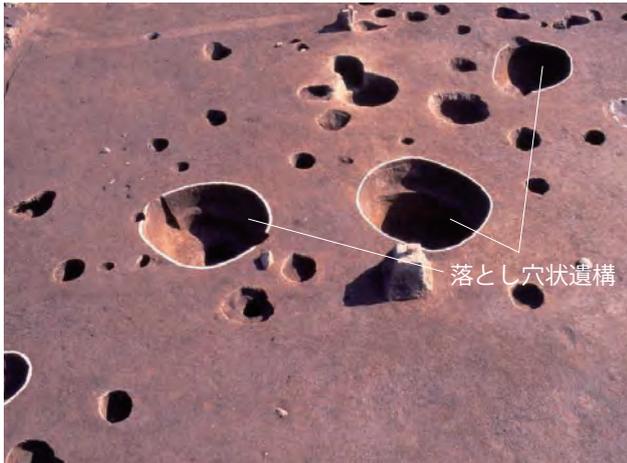
土坑は38基検出されていますが、その性格は不明です。ただし、やや深い掘り込みを持つものがみられ、これについては完形の土器や特殊な注口土器がまとまって出土していることから、これらの遺物を埋納した土坑墓であるとも考えられます。

遺物は、遺構内及び遺物包含層より出土し



内田町遺跡の位置と調査区

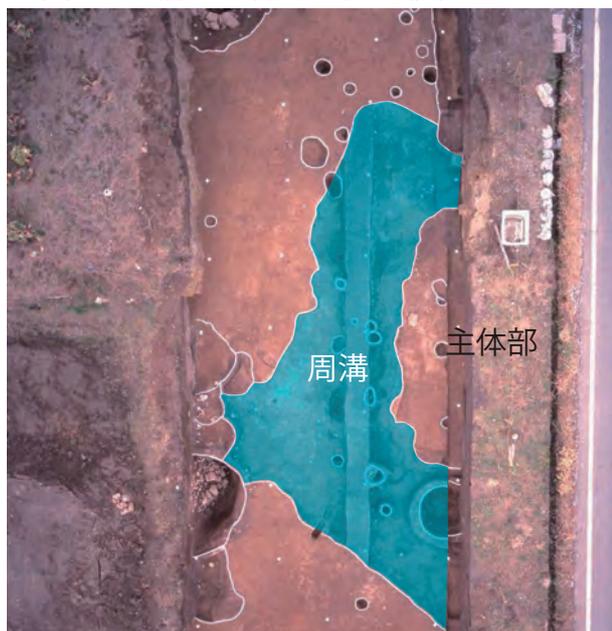
ており、特にA区南側からB区北側に集中していました。時期的には縄文時代中期末から後期中葉（約4700年前～4000年前）に位置付けられ、特に後期初頭から前葉にかけてのものが中心となります。その内容は鉢類を主体とした縄文土器や、石鏃・石錐・石匙などの小型石器、打製石斧などの大型石器があり、特殊なものとして石棒が1点出土しています。



縄文時代の遺構

古墳時代前期は、D区より方形周溝墓と考えられる溝の一部が検出されました。主体部（棺を納める場所）は調査区外に所在すると思われるため不明ですが、周溝の一辺と土盛の一部が確認されており、周溝内より古墳時代初頭の土器が出土しています。

中世の遺構・遺物は全区で検出されています。



方形周溝墓

すが、明確に建物跡を伴う遺構群はA・B区で確認されました。遺構群は、溝、多数の柱穴、井戸、土坑などで構成され、柱穴群の検討により6軒の掘立柱建物跡、10列の柵列が確認されました。これらの遺構群は、出土する遺物の時期により12世紀中葉～13世紀初頭（1期）、13世紀前葉～14世紀前葉（2期）、14世紀後葉～15世紀前葉（3期）の3期に区分されます。

1期は南北を溝で画され、北側に三軒の掘立柱建物跡が隣接して存在しました。その内1軒は2重に柱穴が巡る<sup>ひざしつき</sup>掘立柱建物で、主屋と考えられます。

2期はやはり南北を溝で画され、2軒の掘立柱建物跡が1期よりやや南側に存在しました。建物跡の北側には井戸跡や大型の土坑が集中し、更に北側には5列の柵列が南北にみられます。

3期では北側の溝が消滅して、その代わり



中世の遺構群（柱穴など）



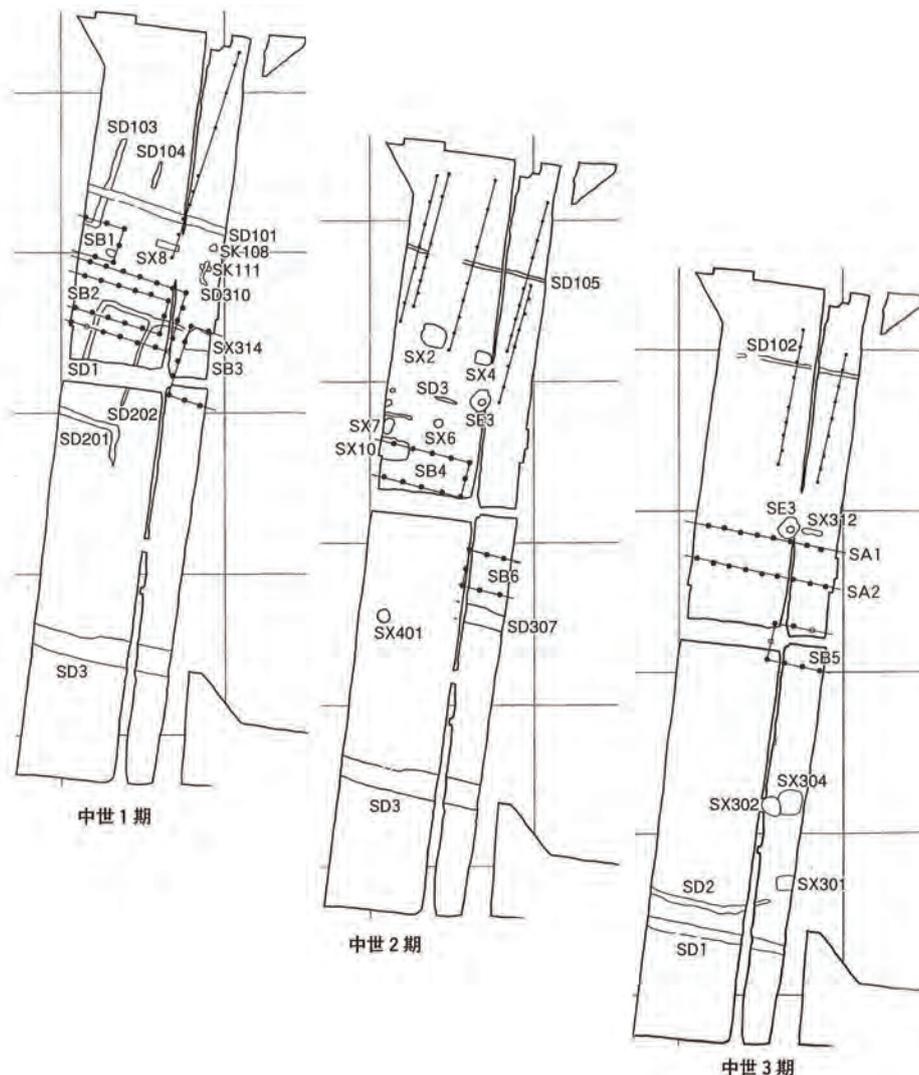
中世屋敷の南側区画溝

2列の柵列で区画され、南側でも2期までの区画溝に代わってさらに南に溝が造られたようです。その区画内には掘立柱建物跡が1軒確認され、南側に方形の大型土坑が集中していました。井戸は継続して存在していましたが、北側を区画する柵列よりさらに北側の区画外になりました。

3期にわたる中世遺構群の構造は基本的には共通しており、南北を溝あるいは柵列で画された屋敷地と考えられます。区画北側は耕作地と考えられ、屋敷地とその所有となる耕作地のセットを一単位とする集落構造が考えられています。また、掘立柱建物跡と柵列の方位は時期ごとに若干異なり、時代が下るに

つれ北向きへ方位を変えています。水野地区においては、条里地割の存在が指摘されており、航空写真からの読み取りにより、北から約15度東へ傾いた方位による地割が復元されています。内田町遺跡の建物跡と区画溝・柵列の方位も平均すればほぼこの方位に従っており、基本的には条里地割に規定された集落・耕地方位であったと考えられます。

中世の出土遺物は山茶碗、古瀬戸、大窯製品などいわゆる地元で生産された陶磁器類が主体となりますが、青磁碗や白磁玉縁碗など中国陶磁もみられ、高級陶磁器を所有し得た階層の屋敷地であったと考えられます。



内田町遺跡の中世遺構の変遷

# 殿様街道

尾張藩二代目藩主徳川光友は藩祖徳川義直の遺言に従い、源敬公の廟所（源敬は徳川義直の諡（おくりな））を定光寺に造りました。それ以来、歴代の尾張藩主は名古屋城から定光寺の廟所まで大名行列を組んで毎年少なくとも3回は墓参りするようになりました。この墓参りの道を「殿様街道」と呼んでいます。現在では殿様街道の大部分は区画整理などで消滅していますが、中水野町から定光寺町までの山間部にわずかながら当時を偲ぶことができる殿様街道が残っています。

初代尾張藩主の徳川義直公は狩猟が大好きで、狩りのために水野の山々を度々訪れ、猪や鹿の狩猟を楽しみました。そして水野の奥山にある定光寺へも足を運び、風光明媚な定光寺の景色をこよなく愛し“自分が薨（みまか）った後に定光寺の地に廟（墓）を作り葬れ！”と言い遺（のこ）したと伝わっており、嫡男で後継者の二代藩主光友は遺言に従い定光寺に「源敬公御廟所」を造りました。

それ以来、歴代の尾張藩主（殿様）は、少なくとも年間3回（命日、正月、九月）は名古屋城から定光寺の源敬公廟まで大名行列を組んで墓参りを繰り返しました。この墓参りの道を「殿

様街道」と呼んでいるが、江戸時代の文献や村絵図には「殿様街道」という文字はまったく載っていないので、街道の公式名称ではありません。例えば、尾張徇行記には「定光寺街道」および「水野街道」と書かれ、中水野村絵図では「定光寺御道筋」、沓掛村絵図では「往還通り」、新居村絵図では「御成筋」と表示されています。

“尾張の御殿様が、ご先祖さまのお墓参りに通る道”というので、地域の人々が勝手に「殿様街道」と名づけたと愛称だと思われます。「殿様街道」という言葉は明治以降になって一般的に使われるようになったのでしょうか。

## 1 殿様街道はどこからどこまでを指すのか

歴代の尾張藩主が先祖にお墓参りに行くときは、いつも生活している名古屋城「二の丸」を出発して出来町通を東へ進み、赤塚で左折して善光寺街道（下街道）に通じ大曾根まで進み、大曾根からは信州飯田みち（瀬戸街道）を東へ進み、守山・小幡・大森・印場を経て新居村の「八瀬（やせ）ノ木」（現・尾張旭市城前町砂川（すがわ））の交叉点のすぐ東側へ至ります。八瀬の木で瀬戸街道から離れて中水野村を通して定光寺門前へたどり着きます。



名古屋城から定光寺までの道のり（およそ6里（24km））





(東光寺薬師堂)



東光寺薬師堂とその棟瓦

#### 4 水野左衛門尉殿(さえもんのじょうどの)城跡と伊左衛門屋敷跡

中水野村の桜井伊左 x 衛門家は段丘地(高台)に広大な敷地と大邸宅を構えていた大富豪で、村人のために尽くす篤志家(とくしか)として村人に尊敬され、その邸宅があった場所は、先祖の七郎左衛門から名付けられた「七郎左(しちろうざ)」という地名で今でも呼ばれています。当家所蔵の古文書には、初代藩主の義直公が水野の山へ狩猟に来たときに立ち寄って休憩した記録が残されています。

その子孫は代々伊左衛門と名乗り、明和5年(1768年)には一般平民でありながら刀を持つことを許され、同7年(1770年)に苗字を名乗ることを許され、翌8年には名古屋城へ登城して藩主に年頭挨拶を仰せ付かるなど、破格の待遇を受けた水野を代表する大庄屋でした。「伊左衛門屋敷」は子孫が後に転居した場所で、地元では「おやしき」と呼び、入口の急な坂道を「もん坂」と言います。

寛政4年(1792年)村絵図に「水野左衛門尉殿城跡」と表示されている場所が描かれており、



もん坂と石垣

現在でも残っている「伊左衛門屋敷跡」とおおよそ同じ位置です。この村絵図には「古城1ヶ所水野左衛門尉殿城跡と申し伝えられるが、時代や年号等についてはわからない。」と記されています。

水野左衛門尉(さえもんのじょう)という人物は、建武新政の頃(1335年)足利(あしかが)直義(なおよし)からの援軍要請に応じて活躍した南北朝時代の武将で、水野平七(へいしち)致国(むねくに)と言ひ、入尾城主・平(たいらの)景貞(かげさだ)の子孫に当たります。

水野左衛門尉は水野中郷(中水野村の旧称)に居城を構え「中郷(なかごう)殿(どの)」とも呼ばれており、臨済宗建長寺派高僧の覚源(かくげん)禅師(ぜんじ)を招き、定光寺の創建に深く関わった人物です。

水野左衛門尉が活躍した時代は、伊左衛門が邸



水野村絵図中の「水野左衛門尉殿城跡」

宅を建造した時期から遡(さかのぼ)ること約460年前のことですが、水野左衛門尉殿城跡の敷地の一部を利用して伊左衛門が邸宅を建てたと考えられ、土塁や堀切は見当たらないものの

積み上げられている石垣などから、伊左衛門屋敷と水野左衛門尉殿城は同一敷地と推測されま

### 5 本日、散策する場所

本日、散策する場所は尾張の殿様がお墓参りを済ませて源敬公御廟所がある定光寺から名古屋城へ帰る道筋をたどり、定光寺自然休養林の中を歩いて東光寺へ向かう「石坂」という殿様街道の一部です。

この場所が殿様街道の面影を最も色濃く残している所です。

源敬公廟がある定光寺門前から出立し、霊亀岩橋(れきがんばし)を渡り、大牧湿地を歩いて定光寺自然休養林の東海自然歩道を歩いて丸根山の山頂まで登坂しますが、この区間は、本日は自動車に乗って移動します。

丸根山の山頂には広い駐車場があり、その西端に定光寺自然休養林の森林交流館が建てられており、この辺り景色について尾張徇行記(おわりじゅんこうき)の中水野村の項に、次の記述があります。

定光寺山路に横笛(よこぶえ)嶺(とおげ)と云う所があり、この山の頂より西を望めば、玉野村や外ノ原村辺りを眼下に見下ろし、又坂の下り口より、玉ノ川の流れが帯の如く見へ、水辺の村落、一瞥(いちべつ)して尽くせり。佳い景色の地なり。

以前にはこの場所に木製の展望デッキがありましたが、老朽化で危険なためか、現在は取り除かれています。ここからの眺めは素晴らしく、庄内川対岸の高座山や高蔵寺ニュータウンが一望にでき、江戸時代から「横笛嶺」と称して、まるで横笛の音を聴くように、玉の川の川風が吹き上げる絶景地として表現されています。尾

張の殿様一行も険しい山を登ってきてこの景色を眺め一休みしたことでしょう。丸根山大駐車場から南へ降り、キャンプ場入口の辺りまでは殿様街道の道筋を見失いますが、更に少し南へ進んだ辺りに通称「石坂峠」という場所があります。石坂峠で市道から岐(わか)れ、自然休養林の林間を歩いて三沢町(旧中水野)へ向かう急な下り坂は「石坂」と称して、フットボール大の石が敷き詰められた石畳となっています。自然休養林に囲まれた山路は、現在でも民家が一軒もなく殿様街道の面影が残されています。瀬戸市史民俗調査報告書二「水野、掛川地区」編には、殿様街道に関わる地名として以下の場所が示されています。

① ポウツキ	殿様の行列が急な上り登り坂を上りきった平らなところで一休みして待っていると、後の行列が追いついたことからこの名前が付いた。
② 石坂	ポウツキの先にあり、石が敷き詰められた坂であるところからその名前が付けられた。
③ フキヌケ	石坂よりさらに奥の方にあつて、玉野方面からの風の通り道になっており、風が吹き抜ける大変寒いところであることから、この名前が付けられた。
④ 乳母が懐	フキヌケよりさらに奥の方にあつて、常に温っていてジクジクしており、大変暖かい場所であるところから、その名前が付けられた。

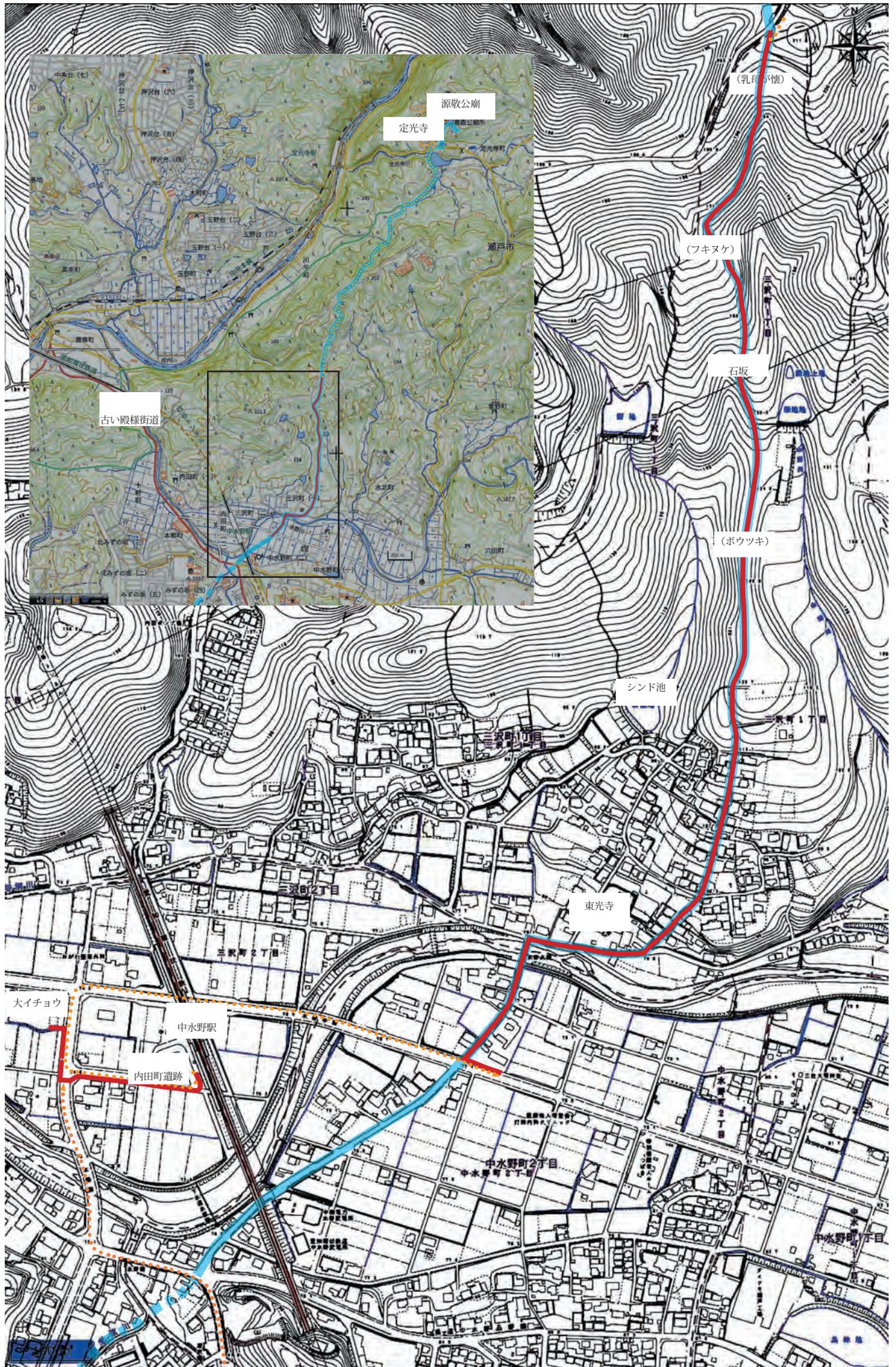
### 【掲載元の文献】

松本博司 2020 「殿様街道を歩く」

令和2年12月5日に掛川公民館・掛川地域力向上委員会により開催された「第2回名所史跡見学とウォーキング」資料(部分)より

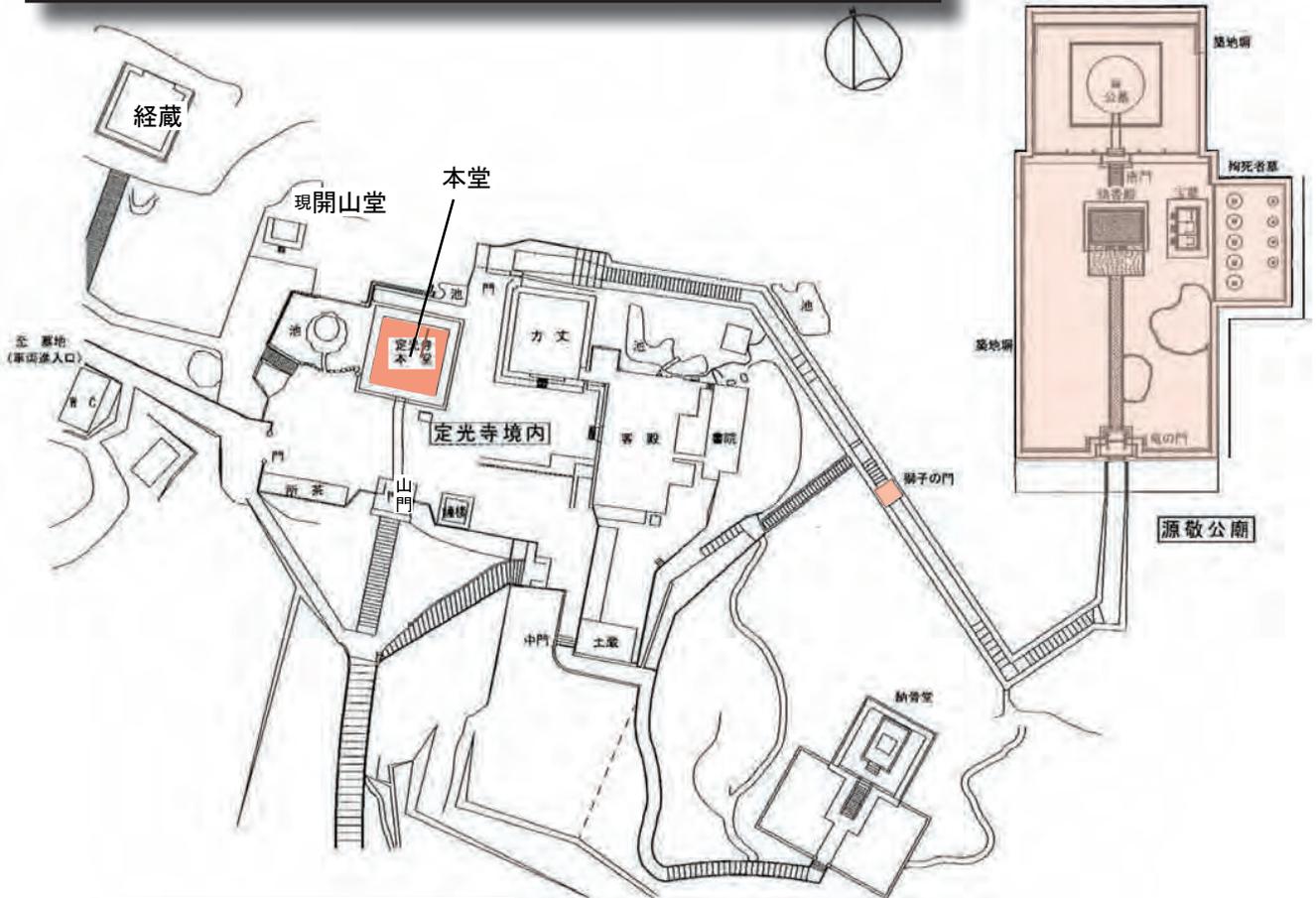


森林交流館から高座山(左)や高蔵寺ニュータウン(右)を望む景色



9 今回の見学ルート(赤線部分)  
 (定光寺街道(殿様街道)は水色、同旧道は緑色ルート)

# 定光寺



本堂内部の見上

応夢山定光寺は、臨濟宗妙心寺派に属し、地藏菩薩を本尊とします。建武3(1336)年に覚源禅師(平心処斎)により開山されました。

本堂(仏殿)は、寺の『年代記』によれば暦応3(1340)年に七堂が建立され、永享7(1435)年・文明9(1477)年に火災にあいますが、明応2(1493)年に再建されました。本尊を安置する宮殿は明応9(1500)年に完成。地震・火災を後に被りますが、天文3(1534)年に建物の再興を遂げました。

その後、本堂の上層部分は、明治13(1880)年以前には板葺きの切妻造の仮屋根となっていました。昭和13(1938)年には本堂全体の解体修理が行われ、上層仮屋根は同様の建築様式の事例や宮殿の構造を基にこけら葺の入母屋造に復元されました。

本堂は、方三間の主屋の周囲に裳階をとりつけた構造で、下層の斗栱や棧唐戸、外壁の花頭窓、内部の海老虹梁や大虹梁・大瓶束の特徴は、典型的な禅宗様をなしています。

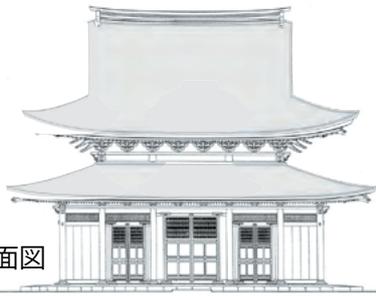
宮殿の置かれた須弥壇の手前には身舎柱の無い広い間取りとなり、高い鏡天井まで上昇感の強い空間構成となっています。



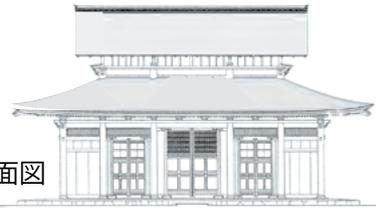
須弥壇の勾欄飾り(鯨形)

# 本堂(仏殿)

(昭和14(1939)年修理後)



正面図



正面図

(昭和14年修理前)



国宝建造物定光寺本堂修理事務所  
1940『国宝建造物定光寺本堂維持  
修理報告書』より)



解体修理(昭和14年)直後の本堂



明治末年の本堂

(太田正弘編1984『定光寺誌』より)



覚源禅師(平心処斎)座像

定光寺開山覚源禅師(1287-1369)の頂相。

木造(ヒノキ寄木造)。南北朝時代(貞治5(1366)年)造立。像内資料には大仏師良口によって造られたと記載。総高118.5cm、像高82.6cm。



智光禅師(喝堂全用)座像

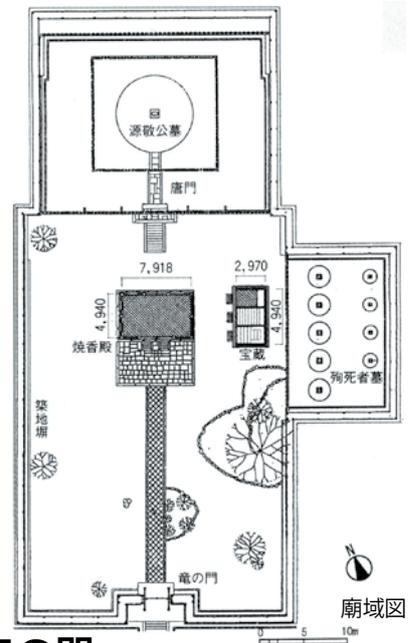
定光寺中興開山智光本性禅師(1596-1656)の頂相。

木造(寄木造)。江戸時代前期造立。総高124.5cm。

# 源敬公廟

源敬公廟は、慶安 3(1650) 年に没した尾張徳川家初代藩主の徳川義直の墓所である。慶安 4(1651) 年に墳墓・石標、承応元 (1652) 年に竜の門以奥の門 (唐門)・殿舎 (焼香殿・宝蔵)・築地塀が完成し、元禄 12(1699) 年に獅子の門が建てられました。

徳川義直は儒教の影響を強く受け、死に際しても他のほとんどの諸大名が仏式の墓を築く中、物仏式の法名を受けることを拒み、霊廟は儒教式の建築となりました。設計は、明から帰化した陳元賛によるものと伝えられ、儒教の礼制に基づく建物配置をとり、殿舎の銅葺瓦に魚形の正吻や蕨手を乗せるなど中国風の意匠が一部にみられる点は他に例を見ませんが、禅宗様を基調として彩色や彫刻は限定的です。江戸時代前期における中国建築の理解の実態を示す事例として興味深い建造物です。



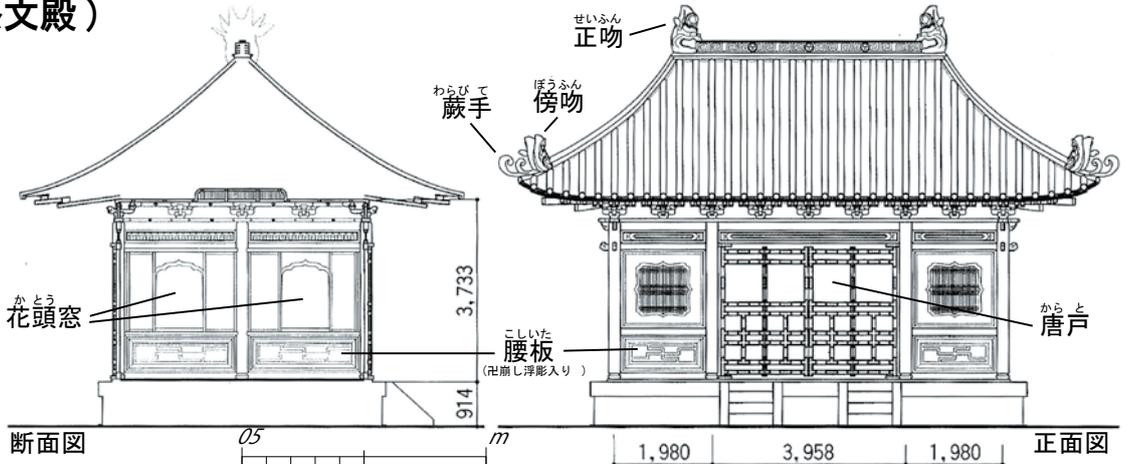
## ◎竜の門



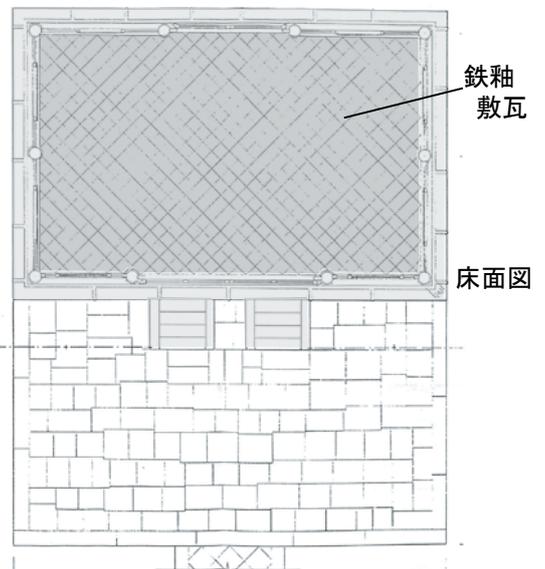
鞍設置前の竜の門 (太田正弘編1984『定光寺誌』より)

## ◎焼香殿 (祭文殿)

正面は中央間が二つ折れの棧唐戸をなし、唐戸に嵌め込まれた綿板の外面には、精緻な雲竜の透かし彫り欄間彫刻がみられます。



鞍設置前の焼香殿





焼香殿床面の鉄釉敷瓦



宝蔵床面の志野釉敷瓦（裏面の墨書）  
 左：「ちノー」「赤津」「又左エ門」「北ノ方」  
 右：「わノー」「品野」「忠左エ門」「北東方」

宝蔵敷瓦の裏に記載された窯・人名一覧

窯枚数	人	名(瓦の枚数)	%
せと 五三	善太 5	左平次 2 善左 1 文字なし 45	五九
品野 一五	忠左衛門 5 彦九郎 1	角左衛門 5 市左衛門 2 一六左衛門 1 文字不明 1	一七
赤津 一三	小左衛門 4 善左衛門 1	多兵衛 3 仁兵衛 3 又左衛門 2	一四
不明 九	文字不明 5	文字なし 4	一〇
総計 九〇			一〇〇

※印 「徳兵衛家文書」「拾四人御用相勤申候者」にある人名  
 (昭和六一年七月 瀬戸市史編纂委員会調査)

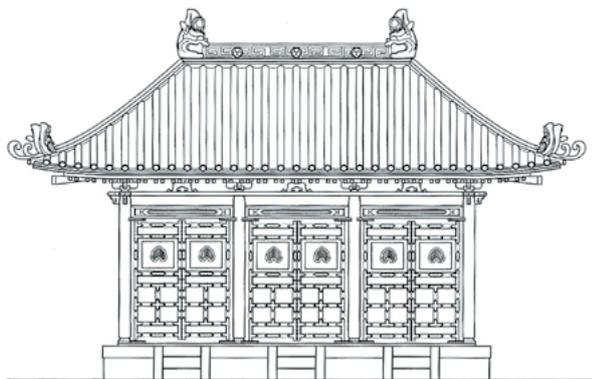
焼香殿敷瓦の裏に記載された窯・人名一覧

窯枚数	人	名(瓦の枚数)	%		
瀬戸 三四〇 △三〇五 △三五	いの助 25 長太夫 27 権三郎 22 久次郎 16 清九郎 17 左平次 14 徳右衛門 11 作兵衛 15 七郎作 11 七郎右 15 七郎作 11	善太郎 10 伝吉 9 作蔵 8 市助 8 角藏 1 角三 1 角左 5 角左衛門 2 伝兵衛 2 文字不明 64	勝四郎 3 久八郎 2 善三郎 2 長兵衛 1 久左 1 長三郎 1 万 15	作左衛門 1 久八郎 2 善三郎 2 長兵衛 1 久左 1 長三郎 1 万 15	五四
品野 一三八	文字なし 一三七	善九郎 1	二三		
あかつ 七五	善左衛門 1 忠右衛門 1 ○(判) 1	又左衛門 2 文字不明 4 文字なし 20	一一		
水野 四三	○(四二・△二)	善九郎 1 文字なし 42	七		
その他 一三	長太夫 1	加藤 市左衛門 11 春二 1	二		
不明 二	文字なし 14	文字不明 7	三		
総計 六三〇			一〇〇		

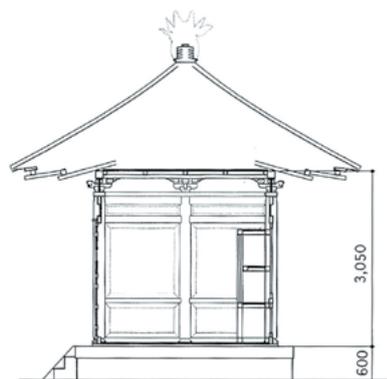
※印 「徳兵衛家文書」「拾四人御用相勤申候者」にある人名  
 (昭和六一年七月 瀬戸市史編纂委員会調査)

◎宝蔵(祭器庫)

(山川一年ほか 1998『瀬戸市史 陶磁史編 5』P142より)

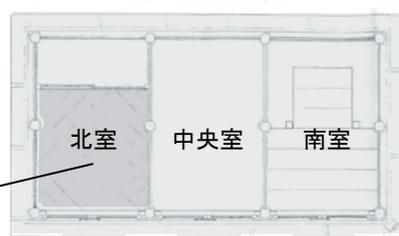


正面図



断面図

鞘設置前の宝蔵



床面図

志野釉敷瓦

焼香殿・宝蔵の正面図・断面図および崩域図は、溝口正人 2006『源敬公(徳川義直)廟』『愛知県史 別編 建造物史跡』より



## 殿様街道の自然

水野の北部には笠原断層が走っている。せと歴では笠原断層によって形成された盆地から、笠原断層によって隆起した坂(標高差125m)を上る。

笠原断層によって水野川は庄内川への合流が制限され、水野地区は氾濫原になった。氾

濫原は田畑になったが、氾濫は近世まで頻発し、田畑や人家に被害をもたらした。水野川は十軒町で北上し、東谷山との間を穿って溪谷形成して庄内川にそそぐ。急流は固いチャートの岩盤に目鼻石と呼ばれるポットホールを形成している。



### 笠原断層

「笠原断層は、東南東-西北西方向の明瞭な断層崖を示し、地形によって追跡できる。また、この断層は定光寺町付近で分岐し、北側を笠原北断層、南側を笠原南断層とした場合、笠原南断層は東南東の延長部で明瞭な断層崖(地域外)を示す。両断層とも南側が上昇している。」Setopedia



### 野生動物が吐き戻した銀杏

イチョウの果肉は種皮が肥厚したもので有毒。消化管を通った糞ではなく、消化吸収する前に吐き出されたものが山中で見られる。



### 瀬戸市指定天然記念物「目鼻石」



### 中水野のイチョウ (瀬戸の名木2 胸高 309cm)

明和4年(1767)7月の大洪水では、当時の下水野村の郷島(現在は本郷町)部落総てが流失した。しかし、このイチョウだけが残ったという言い伝えがある。中国原産の裸子植物。国内のイチョウはすべて植栽されたものである。イチョウには雌雄があるが、このイチョウは雌株で、秋には銀杏をつける。かつて神明神社があった場所にあり、神社のご神木であっただろう。地域の区画整理事業により伐採される可能性があるが、他にかけがえない地域の貴重な文化財であるといえる。



中水野のクロガネモチ  
(瀬戸の名木 78 胸高幹囲 242cm)

クロガネモチはモチノキの仲間で、市制 40 周年 (1969 年) を記念して瀬戸市の木に指定されている。定光寺の参道や岩屋堂浄源寺にも大木があるが、山野に自生しているものはなく、すべて植栽と思われる。「苦勞がねえ金持ち」という名前が好まれたといわれる。内田町旧家の庭にあるものは市内最大で、屋根越しにその優美な姿を見ることができる。この木は雄株で結実しないが、赤い実も庭木として好まれる理由の一つ。



赤津柿  
(瀬戸の名木 78 胸高幹囲 242cm)

化学薬品のない江戸時代には防腐効果がある柿渋が重宝され、コメの代わりに年貢としても納められることがあった。柿渋は渋柿が原料であり、大きな果実をつける枝は接木によって増やされ、品種として確立した。最盛期に品種は全国で 1000 種以上にのぼったとされる。水野では赤津で見いだされた赤津柿が栽培されたが、化学薬品が開発されると多くの品種が衰微し、赤津柿も三沢町の 1 株と京都大学に保存された株があるのみである。瀬戸の名木 87 に指定された個体は民家の庭に残っている。

なお山野に自生する山柿は栽培種が野生化し、原種帰りしたもので、果実の大きさは直径 3 センチ程度に過ぎない。



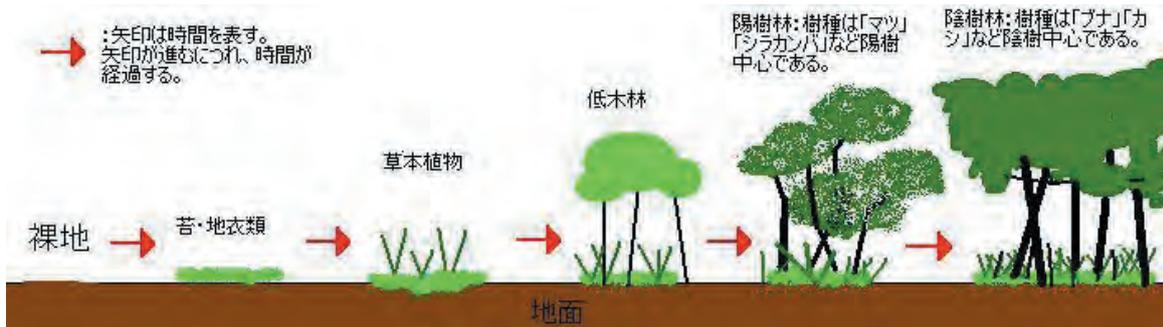
クワ 未指定

水野では大正時代から昭和にかけて養蚕業が盛んで、カイコの食樹であるクワが広く植栽され、その面積は畑の9割に及んだとされる。養蚕の衰退とともに各地にあった桑畑は伐採、転用されたため、栽培樹はほとんど残っていない。この木は東光寺南東の竹藪(水野川左岸)の中にあり、当時の栽培樹の子孫と思われる。右下の写真はカイコの原種クワコの成虫。人の手で飼育され続けたカイコは翅が退化して飛翔できないが、クワコは飛ぶことができる。



アラカシ  
アラカシとツブラジイ

瀬戸市は気候区分では暖温帯にある。暖温帯の土地を長く放置すると、草原から落葉広葉樹林を経て常緑広葉樹林に変わる。常緑広葉樹



スギと孟宗竹

殿様街道を辿って森に入ると、登り始めは人の影響が大きく、自然林の中にスギや孟宗竹が混在している。スギやヒノキは幹が通直で、建築用に価値があることから、戦後の住宅需要を見込んで大規模に植えられたが、花粉症の原因にもなった。孟宗竹は主に食用のタケノコを目当てに植えられたが、繁殖力が強く、植栽されたところから外に広がってしまうため周辺の民家や森林にとって脅威となっている。殿様街道の中腹ではスギや竹は減る。



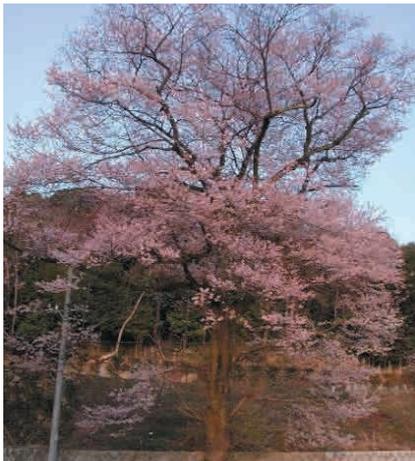
ツブラジイ

の代表がアラカシとツブラジイである。これらが優占すると、森林は安定し、時折、災害で植生が失われる以外は、シイ・カシの森が永続する。上のアラカシは過去に主幹が伐採(薪炭用?)されたが、残された根株の生命力で復活したもの。燃料に薪を使わなくなる燃料革命以降に芽生えたものは右のツブラジイのように幹が1本である。シイ・カシの大木は瀬戸市内では神社の森など伐採を免れたところに多い。



オオウラジロノキ（瀬戸の名木 66 胸高 145cm）

バラ科リンゴ属の落葉高木。瀬戸市内では自生し、春に白い花を咲かせ、秋にはナシに似た果実をつける。山中では果実が大量に落ちているのに会うことがあるが、渋くて食用にはならない。殿様街道のオオウラジロノキは指定時より幹囲が細くなっているが、測定方法の相違のほか 3 本の幹のうち 1 本が枯死したためと思われる。オオウラジロノキから北は東海湖に堆積した砂礫が顕著になる。街道に敷かれた丸石は砂礫層に含まれていたものが使われている。



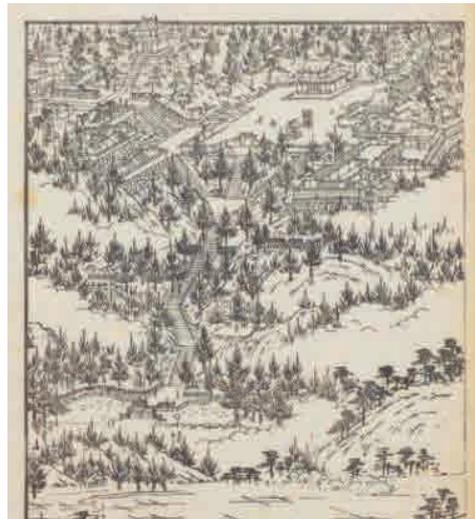
エドヒガン（瀬戸の名木 60 胸高幹囲 286cm）

瀬戸に自生するサクラで数が多いのはヤマザクラ、カスミザクラ、エドヒガンである。主に庄内川の山地に自生し、春に花を咲かせるが、開花の時期、色合いなどに個体差が大きい。樹齢は長く、根尾の淡墨桜など天然記念物に指定される巨木の多くはエドヒガンである。なじみの深いソメイヨシノはこの種と大島桜との遺伝子を受け継ぐ雑種とされる。



オオウラジロノキ（瀬戸の名木 66 胸高 145cm）

東海湖はかつて伊勢湾北部から濃尾平野にかけて存在したと言われる。面積は琵琶湖の 6 倍にもなったという。650 万年前には存在し、300 万年ほど前にもっとも面積が大きくなった。しかし地殻変動の影響を受け徐々に縮小し、現在では跡形もなくなっている。岐阜県多治見市や愛知県瀬戸市では焼き物が活発であるが、その原料となる粘土はこの東海湖に堆積したものである。Wikipedia より



尾張名所図会に描かれた応夢山

幕末から明治に刊行された図会には山全体に立木が少なく、しかも松や杉など針葉樹が描かれている。

はげ山に生えるマツの根にはキノコが菌糸をからめて共生する。ショウロ、コツブタケ、マツタケ、ハツタケなど種数は多くないが、江戸時代には藩主らによるキノコ狩りが行われ、採れたマツタケは下賜されたほか高級品とされるコウタケの記録もある。尾張藩による植林が奏功するにつれて、マツも減少し、それらは取れなくなった。シイやカシなどが優占する現在の植生はその後の 150 年ほどの間に成立したものである。

文責 上杉 毅

## 今後のスケジュール

< 11月 >

せと歴！ 「秋の馬ヶ城」

日 時：令和4年11月26日（土） 午前9時～12時 午後1時～午後4時

集合・解散場所：馬ヶ城浄水場

内 容：瀬戸市の中心市街地からおよそ2km東には、昭和8年から利用されている馬ヶ城浄水場があります。「秋の馬ヶ城」では、昭和初期に建てられた管理棟や、美しい波文をみせる馬ヶ城ダムなど、約90年にわたり瀬戸市内に水道水を供給してきた浄水場の施設を見学します。また、浄水場の東に広がる森の中には中世の窯跡が今もなお数多く残されています。普段入ることのできない森の中を散策しながら、中世の遺跡や様々な植物を見学します。

参加費：無料 定員：20名 申し込み期限：11月15日（火）

※申し込み多数の場合抽選となります。11月17日（木）に抽選結果をお知らせします。

## 瀬戸市歴史文化ホームページ

昨年度、新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「瀬戸市の歴史・文化～1000年以上の歴史を誇るせとものまち 陶都瀬戸～」を開設しました。

これまでに開催した「まちめぐり」の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック「千年続く誇りを巡る旅」、瀬戸を知るテーマ別ガイド「のんびりじっくりせとマップ」、瀬戸の百科事典「瀬戸ペディア」などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご活用下さい。

アドレス：<http://seto-guide.jp/>



主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団